

序論)

今日の箇所はアッシリアの王センナケリブの挑発を受けたヒゼキヤが、【主】に助けを求めた後の【主】からの応答のことばの続きとなります。

今回は、【主】がアッシリアについて預言された言葉が書かれていましたが、今日の箇所はヒゼキヤに対してのことばとなっています。

1) ヒゼキヤへのしるし

【主】がヒゼキヤに対して救いのしるしとして語られたことばは30節から32節となっています。一節ずつ読みましょう。

37:30 あなたへのしるしは、こうである。『今年は、落ち穂から生えたものを食べ、二年目は、それから生えたものを食べ、三年目は、種を蒔いて刈り入れ、ぶどう畑を作ってその実を食べる。

ヒゼキヤたち南ユダ王国は、エルサレム手前の町までアッシリアによって攻められ占領され、さらに攻められ続けていましたから当然、畑を耕す余裕などありませんでした。しかし、【主】はそんな畑を耕すことができなかつた人々が餓死することなく復興すると言われていました。

この預言がかたられたその年は「落ち穂から生えたものを食べる」といわれていますが、神様はイスラエル人たちに麦などを収穫するときに落ちてしまった穂を拾わないように命じられていました。それは仕事もできないような貧しい者たちがその落ち穂を拾って生き残ることができたための、神様流の弱者救済政策でした。ただ、その落ち穂というのは必ずしも貧しい人たちが全部取り尽くす訳では無いので、当然そこからもう一度、根をはり、実を結ぶものがでてくるのです。

神様はその弱者救済のために残された落ち穂によって、エルサレムの人たちが生き残ることができ、さらにその次の年も、最初の年の落ち穂から生えた麦を収穫してさらに残った落ち穂から、生えたものを食べ生き残ることができ、そして、三年目にやっと自分たちで種を蒔き、そこから収穫したものを食べていく通常通りの生活に復興することができる。とされているのです。

私達が大きな被害を受けた時にそこから立ち直るということは簡単ではありません。今もなお東日本大震災の被災地の人たちは完全に復帰できたといえないと思いますし、正月の能登半島地震から一ヶ月が立っていますが、十分な支援がいきと

どいているとはいえないと思います。そして、被害を受けて立ち直ろうとするときに、自分たちでは畑を耕すことも、立ち直ることもできなくなってしまう。そういう時期があるのです。でも、【主】はそのように人が自分の力で立つことができなくなっているときも、必要な支えを与えてくださり、やがて時間はかかりますけど、もう一度、復興し立ち直り、自分たちで種をまき、自分たちで収穫するように、自分たちの力で立てるようにしてくださるのです。

そして、これは 31 節、32 節で語られる救いのしるしでもありました。

37:31 ユダの家の中の逃れの者、残された者は、下に根を張り、上に実を結ぶ。

37:32 エルサレムから残りの者が、シオンの山から、逃れの者が出て来るからである。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。』

戦争前の収穫の時に残った落ち穂が、ユダの人々やエルサレムの人々を養い支えたように、アッシリアの攻撃にさらされてもなお、その攻撃から逃れ、残った人たちが、下に根を張り、上に実を結び、必ず元の姿に戻れるようにする。と【主】は言われているのです。下に根を張りというのは、しっかりとした土台を築けるようになり、上に実を結ぶというのは繁栄をすることができる。ということです。

どんなに傷つき倒れても、自分の力ではもうどうしようもないという状態になったとしても、【主】の熱心が残りの者となるものを残してくださり、このように回復させてくださると。そういつているのです。

ですから、30 節で語られている落ち穂で 3 年間生き残れるというのは、このアッシリアの攻撃から逃れて残った者たちが、イスラエルをもう一度回復させるものとして用いられるという。神様の救いの御業のしるしなのです。

みなさん、これは残ったユダの人たち、エルサレムの人たちが努力した結果なのではありません。むしろ彼らはボロボロに傷ついて何もできない状態でしたけども、それでも彼らを残した。万軍の【主】の「彼らを絶対、救うのだ！」という熱心が彼らを残りのものとして、残したのです。

私達は色々な苦しいこと、悲しいことを経験します。それでも【主】は、なんとかして私達を救うために、やり直しをさせるために、私達を残してくださるのです。だからみなさん、私達が【主】の民として残されているということは大きな大きな恵みなのです。なぜなら【主】は、落ち穂によってエルサレムを回復させるように、残りの民である私達によって神の国を回復させてくださるからです。神様はその計

画の通りに、私達を残りの民にするために情熱を注いでくださったのです。その神様の情熱がどこにあらわれたかという、【主】イエス・キリストの十字架です。

みなさんはキリストの十字架の受難を英語でなんとというか知っておられるでしょうか。キリストの受難は「the Passion of Christ」といいます。そして、そのキリストの受難をメル・ギブソンが映画化したのが「パッション」「情熱」という映画です。

みなさん、この時、エルサレムに残された人たちは【主】の情熱が注がれた人たちであり、エルサレム復興、いやイスラエル復興の鉤となる人たちでした。

そして、キリストによって救い出され。神の民として残るようになされた私達も、【主】の情熱が注がれたものであり、神の国復興のために用いられるようになされたものなのです。だから、みなさん。例え自分の無力さに押しつぶされそうになっていたとしても、希望を失わないでください。みなさんは【主】の情熱が注がれた残りの民なのです。

2) 敵はどうなるか。

対して神様は敵であるアッシリアについてなんとヒゼキヤに言われたでしょうか。
33-35 節

37:33 それゆえ、アッシリアの王について、【主】はこう言われる。『彼はこの都に侵入しない。また、ここに矢を放たず、これに盾をもって迫らず、壘を築いてこれを攻めることもない。

37:34 彼は、もと来た道を引き返し、この都には入らない——【主】のことば——。

37:35 わたしはこの都を守って、これを救う。わたしのために、わたしのしもべダビデのために。』

ここにはいくつかの強調点があります。

一つは、【主】は言われるとか、【主】のことば。というものが強調されているところです。神様の約束のことばの成就としてアッシリアが攻めてこないといっておられます。これは神様のことばには力があり、神様がいったことは必ず実現する。ということをしめしています。

そして、もう一つの強調点があります。神様のこの救いのみわざは、【主】ご自身のためであり、【主】のしもべダビデのためだった。ということです。

これはどうゆうことかという、神様がダビデに語られた約束の言葉が成就して、神様の栄光が現されるために、このイスラエルの救いがあった。ということです。

では、神様がダビデに語った約束とはなんのでしょうか。Ⅱサムエル 7:12-13 を読んでみましょう。神様がダビデに語られた約束のことばです。

Ⅱサムエル

7:12 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。

7:13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。

つまり、ダビデの子孫から【主】によって永遠に王座が保証される存在が生まれるという約束です。これは誰のことを指していますか？ 神の国の王であり、永遠の王である【主】イエスキリストのことです。

【主】はイエス様によって永遠の王座が堅く立てられて、神様の栄光が現されるために、アッシリアがこれ以上攻めてこれないようにされ、イスラエルを救われたのです。それはつまり、ダビデのためであり、【主】のためであり、私達の救いのためでした。

みなさん、今から 2700 年前のイザヤ書の出来事は、私達の救いのための出来事なのです。【主】は私達を救うために、イスラエルに情熱を注ぎ、彼らを守られたのです。ここからも、【主】の情熱が私達に注がれているということがわかります。

3) アッシリアの結末

そして、その結果、アッシリアはどうなったのでしょうか。まず 36 節と 37 節。

37:36 【主】の使いが出て行き、アッシリアの陣営で十八万五千人を打ち殺した。人々が翌朝早く起きて見ると、なんと、彼らはみな死体となっていた。

37:37 アッシリアの王センナケリブは陣をたたんで去り、帰ってニネベに住んだ。

なんと【主】はアッシリアの陣営の十八万五千人もの人たちを打ち倒されたのです。これは歴史的には聖書以外の記録には残っていません。でも、あの時代。南ユダ王国よりも強い国々を尽く滅ぼし、エジプトにも勝利したアッシリアが、弱小国家南ユダ王国を滅ぼすことができなかったことは歴史的な事実なのです。しかも、当時南ユダ王国自体もアッシリアによってほとんどの町々が占領されていました。記録では 46 もの城壁がある町がアッシリアによって滅ぼされていたそうです。城壁

のある町が 46 こ滅ぼされたわけですから、城壁がない村や町で滅ぼされた数というのはもっと多いでしょう。そのようにボロボロにされた南ユダ王国がアッシリアによって滅ぼされなかったというのは、普通ならありえない出来事です。

なぜ、アッシリアはユダを攻めることをやめたのでしょうか。それは【主】が徹底的にアッシリア陣営を打ちのめされたからです。あれだけヒゼキヤや【主】のことをバカにしたセンナケリブが攻めるのをやめたのは、そこに【主】の業があったからです。そして、38 節

37:38 彼が自分の神ニスロクの神殿で拝んでいたとき、その息子たち、アデラメレクとサルエツェルは、剣で彼を打ち殺した。彼らはアララテの地へ逃れ、彼の子エサル・ハドンが代わって王となった。

こっちはバビロンの記録に、実際にセンナケリブが子どもたちによって暗殺されて、最終的にはエサル・ハドンがアッシリアの王になったということが書かれています。つまり、聖書にある【主】の預言と聖書以外の記録が一致しているということです。

未だ、聖書は空想話であり、作り話だという人がいっぱい居ますけども、でも、【主】のことばと実際の出来事は一致しているのです。

みなさん、【主】は必ず。情熱をもってみことばを成就してくださるお方です。だから、私達はこの【主】のことばを信じ続けていきましょう。

【主】は今日の箇所でも情熱をもって残りの民を起こしてくださるといわれ、ダビデに約束されたイエスキリストのとしえの王座を堅くたててくださると約束され、そして、そのために敵を打倒してくださると言われています。

【主】のこのみことばは必ず成就し、イスラエルだけでなく、神の国も【主】に救われた残りの民によって復興することになります。

みなさん、この言葉を信じていきましょう。

今は、敵にうちのめされ、自分では立つこともできないような状態かもしれませんが。【主】は必ず私達が下に根を張り、上に実を結ぶようにしてくださいます。イスラエルに対してなされたしるしは、私達のためのしるしでもあるのです。そのことを信じ続けていきましょう。